

國學院大學学術情報リポジトリ

昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけ：
たちばな幼稚園の使用記録を手がかりとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣井, 雄一, 相澤, 京子, 田甫, 綾野 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001275

昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけ

—たちばな幼稚園の使用記録を手がかりとして—

廣井 雄一 相澤 京子 田甫 綾野

【キーワード】

紙芝居 幼稚園 保育教材 使用記録

1. 問題の所在

國學院大學では、私立たちばな幼稚園（東京都目黒区）が平成3年に閉園するにあたって國學院大學幼児教育専門学校（平成25年3月閉校）に寄贈された全406作品を「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」として所蔵している。

紙芝居は図書などとは扱いが異なり、図書館などでも収集・整理されにくいことから、印刷紙芝居であってもその所蔵を網羅的に把握するのは困難な状況にある（堀田穰 2011）。そのような中で、溝手恵里ら（2001、2008）は倉敷市の私立幼稚園に残存する紙芝居についての調査・研究を行っている。保育現場には昭和期の紙芝居が保管されている場合もあると考えられることから、今後このような調査の積み重ねが必要になってくると思われる。筆者らは、たちばな幼稚園が視聴覚教材を保育に積極的に活用していたことや、「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の概要、さらにこれらの紙芝居がたちばな幼稚園で保育教材としてどのように活用されていたのかを考察してきた（相澤ほか 2011）。

「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の全406作品は昭和30年代から昭和40年代の作品が7割以上を占めている。この時期は戦後、「教育紙芝居」が量産されはじめた時期にあたる。この紙芝居が資料として貴重であるのは、その量や質はもちろん、それぞれの紙芝居に分類がなされ、さらにすべてではないが紙ケースに使用記録が記載されていることにより、たちばな幼稚園がこれらの紙芝居をどのように保育教材として認識し、活用していたのかが分かることである。当時の保育現場における紙芝居の位置づけについては、鬢櫛久美子ら（2005）が、昭和30年に行われた制作者・利用者・教育者それぞれの立場から紙芝居の問題点と改善点を話し合う座談会を引用しながら、保育者が「集団保育場面で子どもの注意をひきつける小道具のように用いている様子も見られる」ことを指摘している。ここからは当時の保育者が紙芝居をどのような教材として捉えているかが分かるが、具体的な作品に即した検討も有益であろう。そこで、本稿ではたちばな幼稚園での使用記録について取り上げ、昭和30年代の幼稚園において紙芝居がどのような位置づけであったのかを考えてみたい。

昭和30年代はわが国の幼稚園教育が発展した時期と考えられる。昭和31年に幼稚園教育要領が刊行され、具体的な幼稚園における教育の目標や内容が示されることとなった。ここでは、目標

を設定することが重要であるとしているが、それにそって内容を決め、活動を設定することは避けるべきであるとされている。つまり幼児の具体的な生活経験を通して、目標を達成するのであり、その中にさまざまな領域の内容が含まれることが示されている。しかしながら、実際には目標を達成するための幼児の活動を教師が設定していたことも多かったようである⁽¹⁾(田甫 2004)。

このように昭和31年の幼稚園教育要領は幼稚園が学校として小学校や中学校と同じように扱われるようになったという意味で非常に大きな前進といえるが、その現場での扱われ方はさまざまであったことが分かる。そこで、本研究では、たちばな幼稚園の紙芝居を分析することを通して、当時の幼稚園における教材の使われ方を明らかにし、当時の保育実践がどのようなものであったのかを考える一助としたい。そこで、本稿では、たちばな幼稚園での紙芝居の使用記録を分析することにより、昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけについて検討することを目的とする。

「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の全406作品のうち、使用記録が記載された30作品（使用記録は38回）を対象とし、作品の内容と使用記録の記載内容を分析する。また、使用記録が記載された30作品の内容の傾向と使用された目的の関係性を検討する。さらに作品の内容の傾向として代表的な作品を取り上げ、その特徴について分析することとする。

2. 使用記録の概要と分析

「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」全406作品のうち、紙ケースに使用記録が記載されているのは30作品、38回分である（写真1）。そもそも、古い年代の紙芝居の多くは紙ケースそのものが消失してしまっているが、使用記録の表は昭和20年代に発行された61作品のうち、紙ケースが現存している8作品すべてに貼り付けられていた。その後も昭和40年1月以前に発行された作品のほとんどに使用記録の表が貼り付けられていた⁽²⁾。この表には、月・日・学年・抜者・使用目的・備考の欄が設けられている（写真2）が、日付の中に「38」「39」という記載があり、それが昭和38年、39年であると考えられる。また、使用記録に記載のある作品の発行年が昭和29～37年であることから、昭和30年代後半の使用記録であることが推察できる。



写真1. 紙ケースに貼付された使用記録

[illegible]

写真2. 『ぴんきーのうんどうかい』の使用記録

この使用記録をまとめたのが表1である⁽³⁾。

表1. たちばな幼稚園での紙芝居の使用記録

目録 番号	タイトル	内容の傾向	使用記録					使用目的分類	
			月 日	学年別	扱者	使用目的	備 考		
17	えへん！カマスのめいれいだ	昔話等の再話	4月16日	年長 2	あつ子 森川	散園前のひととき		使用目的が明確 ではない記録	その他
19	お月さまいくつ	昔話等の再話	9月26日	年少	ひとみ 敏子	年長プラネタリ ウム見学にちなみ 秋の月を		使用目的が明確 な記録	行事
			10月2日	年長 2	あつ子 春日	散園前／星や月に 関連して		使用目的が明確 な記録	季節
25	ひとりのできるね	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	4月16日	年少	吉村	生活指導		使用目的が明確 な記録	生活指導
27	おかあさんのあんだ ばうし	昔話等の再話	12月18日	年長 1	敏	バス待ちの間	寒さに向って 丁度よかった	使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
33	おおきなふねちいさ なふね	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	10月23日	年少	敏	昼食時の休息	大変興味を示 しもう一度 やってと云う	使用目的が明確 ではない記録	休息
36	ベータはどこだ	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	12月18日	年長 1	敏	バス待ちの間	ニュースとか み合せる	使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
38	ひとつのおかし	昔話等の再話	6月25日	年長一 年	石橋	お弁当の後のひ と、きとして使用	非常に興味が あったらしく 喜んだ	使用目的が明確 ではない記録	休息
40	ゆきの子はげんき	昔話等の再話	38.2月4日	つき ほし		雪の話し合いの導 入として	⑧がぬけて⑪ 2枚あり	使用目的が明確 な記録	季節
			39.2月19日	年長 1	敏	雪合戦の後	〃	使用目的が明確 な記録	遊び
41	おうじとねずみ	昔話等の再話	2月8日	年長 1 年少	敏	雨の為バス待ちの 間		使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
48	へんでもわらいっこ なし	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	6月6日	年少	ミドリ	制作おえかきなど へんな子がいると 友達が笑うことが あるので		使用目的が明確 な記録	生活指導
50	どうぶつがっこうの しんたいけんさ	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	12月3日	さくら	ひとみ	明日の予防注射の 為		使用目的が明確 な記録	行事
51	あめひめさま	昔話等の再話	6月12日	年少	ミドリ	雨の力を知るため	年少にはすこ しむずかし かった	使用目的が明確 な記録	知的学習
55	かためのトラック	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	10月23日	年長 1	園児	おべんとうの後の 休息		使用目的が明確 ではない記録	休息
57	月へいったたろう	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	9月25日	年長 2	あつ子 かすが	プラネタリウム見 学の話し合いのため	興味をもって みた	使用目的が明確 な記録	行事
60	ぶっぶーあぶない	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	10月12日	年 1	秋葉	交通安全運動によ せて	遊びの発展導 入により	使用目的が明確 な記録	生活指導
			10月15日	年少	敏	交通安全運動によ せて		使用目的が明確 な記録	生活指導
61	くろちゃんのふゆご もり	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	12月4日	年長 2	あつ子 春日	冬ごもりの話し合 いの一助として	春が来るのが 今の季節とし てはピンとこ ない	使用目的が明確 な記録	季節
			3月9日	年少	ひとみ 鈴木	春になりそれぞれ 動物が冬ごもりか らさめる頃を知ら せたい		使用目的が明確 な記録	季節

昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけ（廣井・相澤・田甫）

目録 番号	タイトル	内容の傾向	使用記録					使用目的分類	
			月 日	学年別	扱者	使用目的	備 考		
64	一、二、三でとびま しょう	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	2月15日	年長1	敏	数え(ママ)の興味を おこさせる	数字の歌を共 にうたう	使用目的が明確 な記録	知的学習
67	まこちゃんのおひな さま	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	2月27日	3才 4才	ひとみ	「ひなまつり」導 入の為		使用目的が明確 な記録	行事
			3月4日	年少	鈴木	「ひなまつり」の 事後指導	おひなまつり を思いおこし よかった	使用目的が明確 な記録	行事
68	あなたはどのこ	「創作」作品 ①意図を直接 表現した作品	4月16日	年少	梅田	バス待つ間		使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
230	どんぐりころころ	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	11月7日	年長1	春日	おべんとうの後の 休息		使用目的が明確 ではない記録	休息
235	うさぎのおうち	「創作」作品 ①意図を直接 表現した作品	10月28日	年長1	敏	雨降りて外遊びが できないので		使用目的が明確 ではない記録	その他
239	なかよし・こよし	「創作」作品 ①意図を直接 表現した作品	4月22日	年少	梅田	バス待つ間		使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
243	雪ひめのプレゼント	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	2月8日	年長1 年少	敏	雨の為、バス待ち の間		使用目的が明確 ではない記録	バス待ち
252	お山のおんがくかい	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	11月6日	年少	敏	昼食後の休息に	半分	使用目的が明確 ではない記録	休息
			11月13日	年少	敏	昼食後の休息に	後の半分	使用目的が明確 ではない記録	休息
260	さる太のやくそく	「創作」作品 ①意図を直接 表現した作品	7月1日	年長 一年	石橋	ボール遊びの後で 使用	引抜のところが 面白かった	使用目的が明確 な記録	生活指導
			10月22日	年長 一年	敏子	おべんとう後の休 息	前に見ていて もとても静か であった	使用目的が明確 ではない記録	休息
273	はしれはしれ三輪車	「創作」作品 ①意図を直接 表現した作品	6月14日	年少	ミドリ	おしまつが出来る 様に	大分考えて“僕 できるよ”と いていた	使用目的が明確 な記録	生活指導
290	ほたるのきょうだい	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	6月12日	年少	ミドリ	ほたるに興味をも ち、知るため		使用目的が明確 な記録	知的学習
291	のぶちゃんとかま	「創作」品③ 物語自体を楽し むための作品	9月16日	年長1	敏	バスの待ち時間、 15夜にちなみ		使用目的が明確 な記録	季節
292	ぴんきーのうんどう かい	「創作」作品② 意図を物語で表 現した作品	10月9日	3・4才 混合	ひとみ	運動会を一層興味 づける為		使用目的が明確 な記録	行事
			10月22日	年長1	園児	運動会の思い出		使用目的が明確 な記録	行事
298	とらきちのだいサー カス	「創作」作品③ 物語自体を楽し むための作品	11月27日	年少	ひとみ	子供からサーカス の話がでていたの で、		使用目的が明確 な記録	興味

紙芝居を使用した際の使用目的について記録を見ると、〈使用目的が明確な記録〉が23回、〈使用目的が明確ではない記録〉が15回であった。それをさらに分類して整理すると、集団生活、規範等への意識を高めることをねらいとしたもの〈生活指導〉、行事への意識を高めるものや行事の振り返りをねらいとしたもの〈行事〉、季節にちなんだもの〈季節〉、自然環境や数に関心を向けることをねらいとしたもの〈知的学習〉、対象となる子どもの興味関心に合わせて作品を選ん

だもの〈興味〉、紙芝居を演じる前の子どもの遊びに合わせて作品を選んだもの〈遊び〉とまとめることができた。それぞれ、〈行事〉が7回、〈生活指導〉が6回、〈季節〉が5回、〈知的学習〉が3回、〈興味〉1回、〈遊び〉が1回であった。

また扱者の記載があり、扱者の紙芝居への意識の違いを見ることができる。「ひとみ」、「ミドリ」は〈使用目的が明確な記録〉が多くみられた。「ひとみ」は〈行事〉が4回、〈季節〉が1回、〈興味〉が1回であった。「ミドリ」は〈生活指導〉が2回、〈知的学習〉が2回であった。一方で、「敏」は12回のうち4回、「梅田」は2回すべてが〈使用目的が明確ではない記録〉の〈バス待ち〉であった。このことから、同じ園に勤務していても紙芝居を使用する教師によって紙芝居についての捉え方が異なっていたと言える。

使用時期は夏休み前の4～7月は〈生活指導〉での記録が4例と多くみられた（表2）。記録の内容を詳しくみると、4月は『ひとりでするね』『使用目的：生活指導』（学年別：年少）、6月は『へんでもわらいっこなし』『使用目的：制作お絵かきなどへんな子がいると友達がわらうことがあるので』（学年別：年少）、『はしれはしれ三輪車』『使用目的：おしまつが出来る様に』（学年別：年少）、7月は『さる太のやくそく』『使用目的：ボール遊びの後で使用』（学年別：年長）であった。このように、夏休み前には、〈生活指導〉に分類できる4回の記録のうち、3回の記録が年少クラスであった。ここからは、年少クラスにおいて入園間もない時期には生活指導を目的として紙芝居が使用されていたということが言える。つまり、教師にとって、集団生活に慣れていない年少児に対して生活指導を行う際、紙芝居は活用しやすい教材であったのであろう⁽⁴⁾。

一方、夏休み後の9～3月は〈行事〉、〈季節〉に使用目的を分類できる記録が多くみられた。四季のある日本にとって季節やそれにまつわる行事は子どもたちの生活に密接にかかわっている。幼稚園生活でも同様に、昭和31年の幼稚園教育要領でも、教師は行事や季節を考慮して計画を立案することが求められている。使用記録からも9月にはプラネタリウム見学（『お月さまいくつ』『月へいったたろう』）、10月には運動会（『びんきーのうんどうかい』）、12月には予防接種（『どうぶつがっこうのしんたいけんさ』）、2～3月にはおひなさま（『まこちゃんのおひなさま』）など、行事の導入や振り返りの教材として紙芝居が活用されていた。

表2. たちばな幼稚園での紙芝居の使用時期と使用目的

(回)

	使用目的が明確な記録						使用目的が明確ではない記録			計
	行事	生活指導	季節	知的学習	興味	遊び	バス待ち	休息	その他	
4月		1					2	1	1	5
5月										0
6月		2		2				1		5
7月		1								1
8月										0
9月	2		1							3
10月	2	2 ⁽⁵⁾	1					3	1	9
11月					1			3		4
12月	1		1				2			4
1月										0
2月	1		1	1		1	2			6
3月	1		1							2
計	7	6	5	3	1	1	6	8	2	39

〈使用目的が明確な記録〉の中でも、〈興味〉や〈遊び〉は他の使用目的とは異なる。〈行事〉〈生活指導〉〈季節〉〈知的学習〉は教師が子どもに対して何かを伝えることを目的にしており、教師の思いにより紙芝居を選んでいる一方、〈興味〉(『とらきちのだいサーカス』「使用目的:子供からサーカスの話が出ていたので、、、」)や〈遊び〉(『ゆきの子はげんき』「使用目的:雪合戦の後」)は教師が作品を選んではいるが、子どものその時の興味をさらに高めたり、それまでの遊びの余韻に浸るといったことを目的としていることから、子どもの思いにより紙芝居を選んでいると言える。これは〈使用目的が明確な記録〉23回中、2回のみの記載であった。

これらのことから、紙芝居は、教師の明確な意図を子どもに伝えるために使用される場合が多いことが分かる。これは昭和31年の幼稚園教育要領で保育する際にねらいを明確にすることが求められたということにもつながっていると考えられる。つまり、子どもの興味関心に沿って保育教材を選択するというよりも、教師がどのようなことを伝えたいかということに重点が置かれていたということを示すことになる。

〈使用目的が明確ではない記録〉には、紙芝居を読む時間についての記載がされていた。一つには〈バス待ち〉の間であり、もう一つは〈休息〉である。

〈バス待ち〉についてであるが、この記録は6回あった。帰りの集まりが終わり、バスが発する時間までの間、子どもたちを一つの場所に集めておく必要がある。その際に、時間を埋めるため、また、バスに乗るまでの時間のつなぎとして使用したと考えてよいであろう。そのような時間に紙芝居を扱う教師は、紙芝居を使用するねらいに対しての意識が低いと考えられる。しかし、当時、すべての活動に対して教育的意図や目的を明確にすることが求められていたはずであ

る。幼稚園の生活の中で〈バス待ち〉の間とは、先ほども述べたように、帰りの集まりの後の時間である。このことから考えると、教師は帰りの集まりを終えて、一部のバス通園の幼児が集まり、バスを待つ間の時間を「正規の保育時間」と捉えていなかったことの表れではないだろうか。したがって、その時間に紙芝居を使用するねらいに対する意識が低く、使用目的も記載されなかったのだと考えられる。つまり、保育教材としての意識ではなく、空いた時間を埋める目的で紙芝居を使用していたという面もあったと言える。

もう一つは、お弁当の後の〈休息〉の時間である。〈休息〉についての記録は7回であった⁽⁶⁾。〈休息〉の時間も使用するねらいが記録されていないが、〈バス待ち〉と同様とは必ずしも言い切れないと考える。昭和23年の保育要領（試案）では、「集団生活においては、個人々々の特質を無視し、過重なしげきや運動を与えやすいから注意を要する」として休息の必要性について述べている。また、昭和31年の幼稚園教育要領では、領域「健康」において「（1）幼児の発達上の特質」に「自分で疲労と休養の調節をすることがむずかしい」と示され、さらに「（2）望ましい経験」に〈休息〉の項目があり、「運動や食事のあと静かに休む」と記載されている。このように保育要領やそれに続く幼稚園教育要領でも幼稚園の生活において子どもに休息を与えることは必要であることが示されていたことから、教師が意識的に休息の時間を設けていたとも考えられる。しかし、〈休息〉時になぜこれらの作品を選び、何を紙芝居の物語を通して何を伝えようとしたのかは、使用記録からは読み取ることはできず、単に“つなぎの時間”として使用されていたという可能性も捨てきれない。

〈使用目的が明確な記録〉からは、子どもの興味関心に沿って保育教材を選択するというよりも、教師がどのようなことを伝えたいかということに重点が置かれていたということが明らかになった。また、〈使用目的が明確ではない記録〉からは、紙芝居の空いた時間を埋めるものとしてえていたことや、意図的に休息の時間の教材としての活用していた可能性が明らかになった。

このことは、最初に述べた、昭和31年の幼稚園教育要領が保育に目標を設定することの重要性を強調したあまり、ねらいを達成するための活動を教師が設定する傾向にあったということと一致していると考えられる。紙芝居という教材も、ねらいを達成するためのひとつのツールとして使用されていたといえるだろう。

3. 使用記録のある紙芝居の内容の傾向

筆者らは「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の特徴を明らかにするために、作品の内容の傾向を大きく「創作」作品と「昔話等の再話」に分類した。中でも、「創作」作品は、①伝えたい意図を直接表現した作品（以下、「創作」作品①）、②伝えたい意図を物語で表現した作品（以下、「創作」作品②）、③物語自体を楽しむための作品（以下、「創作」作品③）の3つの傾向が見られた（相澤ほか 2012、廣井ほか 2012）。

そこで、使用記録が残された作品のうち、〈使用目的が明確な記録〉のある作品の内容と使用

目的との関係について考えたい（表3）。

表3. 〈使用目的が明確な記録〉のある作品の内容の傾向と使用目的 (回)

	行事	生活指導	季節	知的学習	興味	遊び	計
「創作」作品①		2					2
「創作」作品②	4	4		1			9
「創作」作品③	2		3	1	1		7
昔話等の再話	1		2	1		1	5
計	7	6	5	3	1	1	23

「創作」作品①は、〈生活指導〉での記録が2回、「創作」作品②は、〈行事〉で4回、〈生活指導〉で4回、〈知的学習〉で1回記録が見られた。「創作」作品①は教師の伝えたい意図が文章中に明示される作品、「創作」作品②は伝えたい意図が文章中に示されないまでも、文脈からはその意図が読み取れる作品である。

例えば「創作」作品①に分類できる『さる太のやくそく』は物語の中に登場するさる太の「やくそくは まもらなきゃ いけないんだよ」や、うさぎの「ごめんなさい。やくそくを わすれちゃって」という台詞があり、最後は「みなさんは、やくそく まもっていますか？やくそくしたら、きっと まもるように しましょうね。」と締めくくられている。使用目的は「ボール遊びの後で使用」と記載されていることから〈生活指導〉に分類でき、教師はボール遊びの際に「約束を守る」ことの大切さを伝えようとしていたと言える。

「創作」作品②に分類できる『一、二、三でとびましょう』は、登場人物がさまざまな動物と出会う中で、数を数えたり、比べたり、対応させたりすることを経験する作品である。計算をさせたりするのではないため、物語の中に出てくる数に無理なく親しむことができるようになっている。この作品の使用目的は「^(ママ)数えの興味を起こさせる」であることから〈知的学習〉に分類でき、さらに備考にも「数字の歌を共に歌う」とあることから、作品の内容と教師の意図が一致していると言える。

「創作」作品①・②のように作品そのものにメッセージ性が強い作品は、その作品が持つメッセージと教師の意図が一致していないと使用することはできないことから、使用する場面が限定されていることが指摘できる。

一方、「創作」作品③に分類できる作品は〈行事〉で2回、〈季節〉で3回、〈知的学習〉と〈興味〉で1回記録が見られた。昔話等の再話に分類できる作品は〈行事〉が1回、〈季節〉が2回、〈知的学習〉と〈遊び〉が1回であった。これらの作品は伝えるべきメッセージが作品の前面に出て

いるわけではなく、物語を楽しむこと自体を目的とした作品である。そのため、これらの作品の使用の意図としては「物語に親しむ」とか「お話の世界をイメージして、楽しむ」といったようなことが想定されるが、実際にはそのような記録は見られない。昭和31年の幼稚園教育要領では指導計画の重要性が強調され、教育的意図や目的をもって保育することが求められた。つまり、当時の教師は紙芝居を活用する際も物語を楽しむというよりも、何らかのねらいの達成のために保育教材を使用するという意識が強かったと思われる。そのため、「話を楽しむ」というような記録が見られなかったのであろう。

また、「創作」作品③・昔話等の再話では「創作」作品①・②の使用目的が〈行事〉〈生活指導〉に偏っているのとは異なり、〈行事〉〈季節〉〈知的学習〉〈興味〉〈遊び〉と幅広い使用目的に使用されていた。例えば、「創作」作品③に分類できる『ほたるのきょうだい』は、やさしい蛍のきょうだい、困っている動物たちに出会い、「ピカリ チカリ」とあかりを灯して、助けてあげる物語である。この作品からは特に何かを伝えようとする意図は読み取れない。実際の蛍は体を発光させるが、物語中の蛍は明かりを手を持っていることから、生態を伝えようとしているわけではなく、繰り返しのあるストーリーを楽しむ作品である。使用目的は「ほたるに興味をもち、知るため」と記録されているため〈知的学習〉に分類できるが、親しみのもてる物語から自然と蛍に興味をもつことができると言える。

昔話等の再話に分類できる『お月さまいくつ』はアンデルセン童話である絵のない絵本からの物語であり、きょうだいの日常とそれを見守るお月さまが描かれている。使用記録は2回分残されているが、一つは「…プラネタリウム見学にちなみ…」とあることから〈行事〉に分類でき、もう一方は「星や月に関連して」とあることから〈季節〉に分類できる。この作品は「お月さま」が登場するものの、プラネタリウムや月や星に直接つながるものではなく、「お月さま」はみんなの姿をいつも見守っているという内容で、物語を通して、月に親しみを持つことができる作品だと言える。

このように、「創作」作品①、②が使用する場面が限定されてしまうのとは異なり、「創作」作品③と昔話等の再話は作品自体に強いメッセージ性がないため、教師が保育のねらいに応じて、使用する紙芝居に自由な解釈を加え、子どもたちに演じていたことが明らかになった。

4. 紙芝居の具体的な使用例

次に、具体的な作品を見ていきたい。ここでは紙幅の都合上、伝えたい意図が直接表現された「創作」作品①に分類できる『はしれはしれ三輪車』と、作品自体に特に強いメッセージ性がない昔話等の再話に分類できる『ゆきの子はげんき』について取り上げ、作品の内容と使用目的との関係性の実際について明らかにしたい。

（1）「創作」作品①に分類できる作品

『はしれはしれ三輪車』（福島のり子作、渡辺加三画、教育画劇、昭和35年、写真3）

あらすじ

けんちゃんの三輪車をうらやましく思ったくんたくんは誕生日に三輪車を買ってもらう。しかし雨の日も面倒でしまわなかったくんたくんの三輪車は変な音がするようになってしまう。そして、けんちゃんの三輪車はぴかぴかなのに、自分の三輪車はさびだらけになっていることに気づいたくんたくんは泣き出してしまう。お母さんとお父さんに三輪車をかわいがってあげるように言われたくんたくんはさっそく三輪車のおそうじをする。

この作品では主人公であるくんたくんが不調になった三輪車についてお父さんに尋ねると、お父さんは「…雨や、夜つゆに ぬれないように あそんだあとはちゃんとしまっておくことさ。それから、さびたら あぶらで よく ふいて、たいせつに、三輪車を かわいがってやることだよ。」と答える。また、最後には、くんたくんが「ごめんね 三輪車くん、これからは きみのこと わすれて 外に出しっぱなしになんかしらないよ」と言っている。このことから、この作品は保育者の伝えたい意図を直接表現した「創作」作品①であることが分かる。



写真3. 『はしれはしれ三輪車』

また、使用記録を見てみると、「おしまつが出来る様に」という〈生活指導〉に分類できる使用目的が記載されていた。この作品の主人公であるくんたくんが最後に理解したように、教師である「ミドリ」は自分の物は自分で片付けるということを子どもたちに伝えることを意図し、この作品を選んだのであろう。さらに、使用記録の備考には「大分考えて“僕できるよ”といていた」という子どもの反応も記載されていた。このことから、この発言をした子どもはこの作品の主人公であるくんたくんと自分自身とを重ね合わせ、自分はちゃんと片付けができていたということを振り返ったのではないだろうか。

このように、伝えたい意図を直接表現した「創作」作品①の作品は作品自体にメッセージ性が強いので、使用する際も〈生活指導〉に分類できる使用目的で使いやすかったのではないかと推察できる。なお、このような〈生活指導〉に分類できる作品は年少クラスの4～7月に多く使用されていたことを先に指摘したが、本作品からも同様の傾向が確認できよう。

（2）昔話等の再話に分類できる作品

『ゆきの子はげんき』（川崎大治脚本、小谷野半二画、童心社、昭和34年、写真4）

あらすじ

子どものない老夫婦が子どもたちが雪で遊んでいるのを見たことをきっかけに裏庭に作ったかわいい雪人形は、夜になると元気に動き出す。そして、老夫婦の子どもとなり、老夫婦はとてもかわいがった。雪の子は近所の子どもたちとも仲良くなったが、暖かい春が来ると、突然いなくなってしまう。老夫婦は雪の子を探したが見つからなかったので、がっかりし、さびしい日を送るようになる。しかし、毎年冬がくると雪の子は老夫婦のもとに必ずやって来て、子どものない老夫婦を喜ばせた。

この作品は「ロシアのおはなし」と記されているので、昔話等の再話に分類できるが、その「作品解説」には次のようにある。

…子どもたちは、風の子、雪が降れば、雪の子—寒さにめげず、走りまわります。その楽しい雪あそびの中で、この古いロシアの話を思い出したら、どんなにか心豊かな思いがすることでしょうか。



写真4. 『ゆきの子はげんき』

この作品では、雪の子を取り巻く老夫婦の心の動きが物語を突き動かしているが、全体としては幻想的な世界が描かれている。その中に村の子どもたちが雪の子と一緒に遊ぶ場面も描かれており、子どもたちが感情移入しやすい作品であろう。

この作品には2回の使用記録が記載されている。一つは〈季節〉に分類できる「雪の話し合いの導入として」、もう一つは〈遊び〉に分類できる「雪合戦の後」である。この作品はメッセージ性というよりも、物語自体の世界を楽しむ作品であることから、それをどのように使用するのは、それぞれの教師に委ねられていた。そのため、異なる使用目的に分類できるような使用目的で用いることができたのだということが指摘できる。

5. 結論

本稿では、たちばな幼稚園の紙芝居の使用記録の分析から、昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけについて検討した。

そして、たちばな幼稚園の使用記録は紙芝居の使用目的が明確なものとそうでないものに分類でき、使用目的が明確なものについては、教師の意図を紙芝居を通して伝えることを目的とされ

たものが多く、幼児の興味関心や、遊びを充実させるためという記載は少数であることが明らかとなった。また使用目的が明確ではないものについては、紙芝居を演じた時間が記載されており、空いた時間を埋めるためのものとして紙芝居が使用されていたといえる。さらに、これらを紙芝居の内容の傾向と合わせて考えると、メッセージ性が強い作品は使用場面が限られるが、そうでない作品は保育のねらいに応じて、教師が使用する紙芝居に自由な解釈を加え、子どもたちに演じていたことを明らかにした。このことから、昭和30年代の幼稚園において紙芝居は保育教材として教師がさまざまな意図を伝えるための媒体として位置づけられていたことが指摘できよう。

昭和30年代は幼稚園教育要領によって保育する際のねらいを明確にすることが求められるようになったことから、教師がどのようなことを伝えたいかということに重点が置かれて紙芝居が選択され、紙芝居がそのねらいを達成するための保育教材として使われていたことが読み取れた。しかし、その一方で空いた時間を埋める目的でも使用されており、また教師によってその意識が異なっていた。このように、幼稚園教育要領では子どもの興味関心に沿った保育を行うことも重視されていたにもかかわらず、その点についての意識は薄かったことがうかがえる。つまり、当時の幼稚園では、ねらいをもって保育を行うということが偏った形で受け止められ、実践されていた面もあったと考えられる。

この紙芝居の使用記録は当時、ラジオやテレビなどの視聴覚教材を保育へ活用することを推進してきたたちばな幼稚園が、保育教材として積極的に紙芝居を位置付けようとした試みであった。しかし、「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」全406作品中、使用記録が残されているのは30作品のみであった。これは、幼稚園教育要領でも求められ、また園の一部で研究的に保育を行おうとしていた試みであったにも関わらず、実践の場では定着しなかったことを示していよう。その理由としては、日々の保育実践の中で教材を分析的に捉えることや、明確な意図をもって教材を位置づけることが非常に困難であったということが考えられる。

本稿においては、たちばな幼稚園の紙芝居の使用記録の分析から、昭和30年代の幼稚園における紙芝居の位置づけについて検討したが、そもそも個々の紙芝居作品を保育者がどのように捉えていたのかについて考察することも必要となろう。そこで今後の課題としては、たちばな幼稚園が独自に行った紙芝居の分類と使用記録との関係性について考察することである。このことにより、たちばな幼稚園においてそれぞれの紙芝居がどのように捉えられた上で活用されていたのかを明らかにすることができると考える。

注

- (1) 具体的には、山村きよ(1980)による回想文に六領域が教科のようにとらえられたことが示されている。また、坂元彦太郎(1964)は、教育課程が小学校と同様に考えられたと記している。
- (2) その期間の中で、昭和37年7月から昭和38年2月に発行された作品には使用記録の表が貼り付けられていなかった。

- (3) この表の目録番号は「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫 目録」と一致している（相澤ほか 2011）。また、内容の傾向は後述するように筆者らが紙芝居の内容を「創作」作品①～③と昔話等の再話に分類したものである（相澤ほか 2012、廣井ほか 2012）。使用記録は紙芝居の紙ケースに添付された表の内容、使用目的分類は使用記録のうちの使用目的について筆者らが分析したものである。
- (4) 「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の所蔵作品には、ジャンルと季節という2つの視点から園独自の分類がなされているが、それを見てもジャンルが〈生活指導〉で季節が〈春〉に分類されている作品が85作品中32作品と多く、このことを意識して購入していたということが指摘できよう。
- (5) 昭和30年代は商用車が普及し始めたことと同時に、交通事故による死亡事故が増加した。昭和35年には日清戦争の戦死者よりも交通事故死者数が上回る勢いで増加したことから「交通戦争」という言葉が流行語となった。特に子どもの犠牲者が多かった。ここで使用された『ぶっぶーあぶない』（昭和36年発行）は当時の社会状況を反映した交通ルールを知らせる内容であり、9月末に行われていた秋の交通安全運動に関わって用いられたのだと考える。
- (6) 『ひとつのおかし』の使用目的である「お弁当の後のひとゝきとして使用」も同義としてカウントした。

引用文献

- 相澤京子・田甫綾野・廣井雄一・野本茂夫（2011）「旧たちばな幼稚園紙芝居文庫」の保育文化史的意義．國學院大學幼児教育専門学校紀要．第25輯．1-56
- 相澤京子・廣井雄一・田甫綾野・野本茂夫（2012）戦後の幼稚園における紙芝居の保育文化史的考察（1）—昭和30年までの作品の傾向—．日本保育学会第65回大会発表要旨集．372
- 鬢櫛久美子・種市淳子（2005）保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に—．名古屋柳城短期大学研究紀要．第27号．53-67
- 廣井雄一・相澤京子・田甫綾野・野本茂夫（2012）戦後の幼稚園における紙芝居の保育文化史的考察（2）—昭和30年代の作品の傾向と保育実践—．日本保育学会第65回大会発表要旨集．373
- 堀田穰（2011）紙芝居研究の課題—文化史の視点から．紙芝居—子ども・文化・保育．一声社
- 溝手恵里（2001）竹中幼稚園における紙芝居の活用—戦前の所蔵作品について．倉敷市立短期大学研究紀要．第34号．19-25
- 溝手恵里・狐塚和江（2008）倉敷市の幼稚園における保育内容の史的研究—私立竹中幼稚園に残存する紙芝居を中心として（その1）—．倉敷市立短期大学研究紀要．第48号．19-25
- 坂元彦太郎（1964）幼児教育の構造．フレーベル館
- 田甫綾野（2004）昭和31年版幼稚園教育要領に対する保育者の受け止め方．保育学研究．第42巻第2号．184-195
- 山村きよ（1980）回想教育要領の現場での受けとめ方．岡田正章他編．戦後保育史．第1巻145頁．フレーベル館

（ひろいゆういち 國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）

（あいざわきょうこ 國學院大學人間開発学部兼任講師）

（たんばあやの 山梨大学大学院教育学研究科准教授）